

池波正太郎＝原作 小野田勇＝脚色 鈴木龍男＝演出
高木康夫＝美術 池辺晋一郎＝音楽 寺田義雄＝照明 小倉潔＝効果

おれの足音

大石内蔵助



《あらすじ》

若い頃から「昼行燈」と評名されていた大石内蔵助(梅雀)は、ひよんなことからわりない仲になった女中のお幸を追って京へ。そこで京都藩邸詰めになっている幼馴染みの小平次(矢之輔)と再会し、小平次が出入りする京扇問屋の恵比須屋市兵衛の指南で女遊びを修業……。

祖父の死で赤穂五万三千石の国家老を継いだ内蔵助は、やがて但馬京極家の家老の娘りく(妻倉)を娶る。婚礼の夜、「疲れていよう。今夜はゆるりと静かに寝るがよい。案ずるな、明夜、ゆるりと」といたわる内蔵助だった。

内蔵助は江戸の浅野家上屋敷で若い藩主、内匠頭(邦次郎)からお家断絶になった備中松山城の受領使をおおせつかる。夫人阿久利(のち瑤泉院)は内蔵助を頼りに……。

松山城の城代家老鶴見は名も同じ内蔵助。城を枕に討ち死覚悟との風説流れるなか、武装せず平服で城に乗り込んだ大石内蔵助の春風駘蕩ぶりに、武骨一徹の鶴見は……。

十年後、赤穂に届いた「内匠頭殿中刃傷」の急報に、「国を守って平穩に暮らし平凡に生きたい」という内蔵助の願いは破れた。

英雄譚ではない、人間臭あふれるドラマ。

内蔵助という人

あの「忠臣蔵」事件が起こるまでの大石内蔵助は、まことに平凡な日々を送っていた。

愛妻と愛子たちに囲まれ、重要な公務は他の家老や重臣を信頼してまかせ、焼き味噌を肴に晩酌をたのしみ、たまさかに江戸や京都に出る折があれば、庶民的な遊里へ足を運んだりして、それこそ一

国の国家老にしては、おもいもかけぬような遊びを知っていたが、

池波正太郎

あの事件が起らなかったら、浅野家の国家老としての名も残らなかったろう。(中略)

人間というものには絶体絶命の逆境に立ったときでないといふ真価はあらわれぬ。

私は小説「おれの足音」で大石内蔵助を書いたとき、こうした彼の人物に強く魅了された。

…(後略)…

(一九七九年帝國劇場公演「ソフット」より抜粋)

《出演者》



中村 梅雀
大石内蔵助



山村邦次郎
浅野内匠頭



松浦 豊和
奥田孫太夫



姉川新之輔
八助



益城 宏
堀部安兵衛



藤川矢之輔
服部小平次



津田 恵一
鶴見内蔵助



志村 智雄
堀部弥兵衛



横澤 寛美
おくう



小林 祥子
瑤泉院



妻倉 和子
大石りく



西川かずこ
浮橋太夫



渡会 元之
大高源五



亀井 栄克
大石主税



栗沢 学
富森助右衛門



中嶋 宏幸
不破数右衛門



柳生 啓介
関重四郎



深町 稜子
於 千



中村靖之介
原惣右衛門



中村 鶴蔵
大石良欽



菊池 亮
矢頭右衛門七



杉本 雅代
小 姓



永沢 純子
吾 妻



小岩井カリナ
女中 梅



黒河内雅子
玉 波



紫野明日香
お 幸